

テーマ

私が<私>に出会うという体験

適用
分野

心理療法、学生相談、子育て支援



研究
名称

自我体験の心理学的研究

氏名
所属

高石恭子 教授
文学部

内容

●特徴

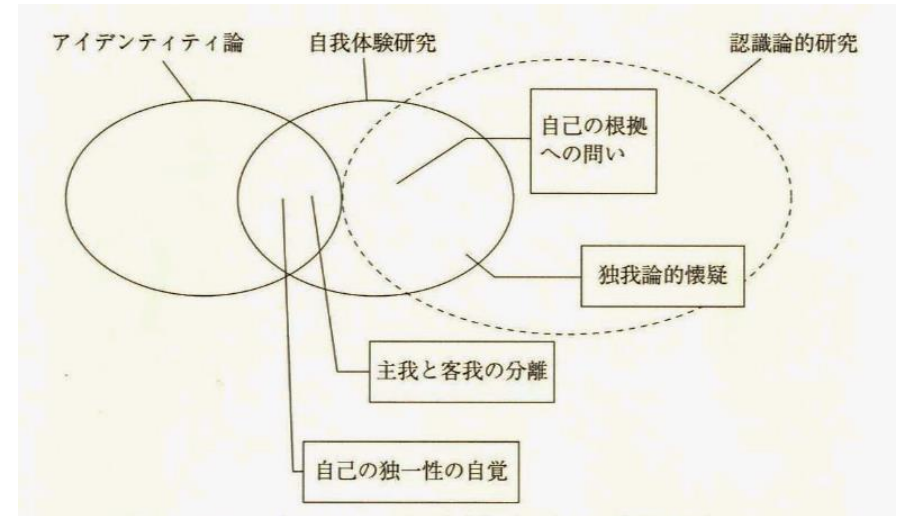
人は自我発達やライフサイクルの節目で、主体としての<私>の働きに気づき、新たな視点から自分自身を見るという世界のコペルニクスの転換を体験することがある。「私とは誰か」と問う<私>が対象化され、自己が二重化するのである。本研究は、そのような私秘的で主観的な体験について、心理学を用いて、質的及び実証的に探究しようとする挑戦的な試みである。

●研究内容

「私が<私>と出会う体験」すなわち自我体験が最初に記憶に刻まれるのは、児童期から前思春期（10歳前後）にかけての自我発達の過渡期であることが多いが、この体験は、幼少期から老年期まで生涯を通じて生起することがこれまでの研究でわかっている。

自我体験は、生き方すら大きく変容させうる心理的解体と再構成の危機的体験となりうる。ドッペルゲンガー（二重身）や自己像幻視などは、病理的な典型例である。

そのような個人の危機的体験過程を守り支えるのが、心理療法の重要な使命であろう。アイデンティティの基礎に存在するこの主観的体験の様相の解明は、学生相談において、青年への心理的支援に寄与すると考えられるとともに、子どもの教育や子育て支援においても、重要な観点を提出するものと考えられる。



アイデンティティ論、自我体験研究、認識論的研究の関係
出典：「<私>という謎—自我体験の心理学」渡辺恒夫・高石恭子共編著 新曜社

キーワード

自我体験、主観的体験、ライフサイクル

連携方法

■ 講演 □ 研修 ■ 研究相談 ■ 学術調査 □ コメント ■ 共同研究